

# Eureka X

六年制通信 No.35 令和5年2月10日(金)号

## 言葉は踊る

日露戦争後のポーツマス講和条約、その後に起こった日比谷焼き打ち事件を持ち出すまでもなく、私たちはよく検証もしないで言葉に流される傾向があるようです。日本人は流言飛語に非常に弱い、そう言ったのは関西大学の谷沢永一さんでしたかね。連日マスコミが同じような報道をし、それを無批判に聞いていると無意識のうちに自分の言動が影響を受け、ついついステレオタイプになってしまいます。怖いですね。言葉はあちこちで踊っていて、私たちはそんな虚実入り混じった世界に、それも一昔前に比べて何倍も「虚」の多い世界に生きているということを自覚しなくてははいけません。言葉が躍るのは仕方ないのですが、言葉に踊らされてはいけませんね。特に耳に心地よい言葉は危険です。意味のあまりわからないカタカナ語には特に弱いですね。アジェンダだのスキームだの 이슈ーだの、あるいはオンデマンドなどが瞬く間に流布するのを見ると、日本人は好きなんだな、こんなのが。日本語で言えばいいのに。

学校現場でも言葉はしょっちゅう踊ります。ゆとり教育なんかいい例ですね。あれの最初の世代は今 35 歳くらいですかね。可哀そうに「ゆとり世代」と呼ばれていますが、それにはマイナスの響きがありますよね。彼らは何も悪くないのに。あのとき、ゆとり教育のキーワードとして円周率を 3 として計算してもよい、というのが一気に広まりました。もちろん文科省はそんなこと、つまり今後円周率を 3 と教えなさいなどと一言も言っていません。ちゃんと検証もせず、マスコミの報道を信じて大騒ぎした例です。私はゆとり教育(大体この名前もマスコミが作ったものです)よりも、当時明らかに問題だと思ったのが、例えば某国立大学で教育学部数学科のセンター試験科目を理科 2 科目から 1 科目にしたことです。どんどん試験科目を減らしていき、そうして受験生の負担を軽減する、そんな名目でしたが受験科目が減ったのだから勉強しない受験生が増えただけでした。そしてその受験生たちを「ゆとり世代」と揶揄する、タチの悪いおふざけです。「ゆとり教育」という「虚」に踊った情けない例ですね。

耳に心地よすぎて無批判に賛同してしまっていることは、案外あります。私は、もうすぐ春ですからまた聴くんだろうなと思いますが、あの「一年生になったら〜♪」というのが不気味で仕方ないのですが、結構皆さん楽しげに歌いますよね。あれ、歌詞は 100 人で「富士山でおにぎりを食べる」「日本中をひとまわり」「笑いたい」という、それがどうしたという内容なのですが、友だちが 100 人ですよ。では、おにぎりを食べ日本中を回り笑うのは 101 人ではないか、というオカルト話はともかくとして、小学校に友だち 100 人を求めて入学するのはそもそも異常ではないかと思うわけです。

「みんな違ってみんないい」とか「多様性」なども同じで、これに賛同しないと何か悪い人間になったような気がする言葉です。しかし、そこで終わらずその先を考えておく必要があります。これらの言葉を正しいとするなら、自分の意に沿わない人々を認めるといふこと、集団の中には必ず対立が生まれ、そのことをよしとするといふこと、露骨に言えば誰もが少しずつ我慢して生きるといふこと、そのことを含んだうで「みんな違ってみんないい」とか「多様性」といふ言葉に賛同すべきです。面白いのは「みんな違ってみんないい」といふ言葉と「みんな仲よくしよう」といふ言葉を矛盾なく受け入れていることです。自分と違う価値観を持つ人間と仲良くするのは至難です。それでも共存しなくてはならない。非常に難しいことなのです、本当は。それを何か「非常に簡単で当たり前でしょ」と言っているかのような標語にして教えるのは、不誠実だと私は思います。うちの四大綱に「チームワークをつくる」がありますが、あれも誰とでも仲良くしなさいと言っているのではないのです。それぞれの特徴（人と違うところ）を生かしてチームで強くなれと言っているのです。対立は知恵を出し合っ解決する。これも困難なことですが、そのことを教育は教えるべきですね。これは教育の世界では有名な話なのですが、学園祭の出し物で合唱か演劇かで対立したとき、どちらかに決めて片方を切り捨てるのではなくミュージカルにするという発想で双方が活躍できるようにする。知恵を出して対立を避けるという一つの例です。

#### 今週のおすすめ

・岩城宏之 『フィルハーモニーの風景』 (岩波新書)

特にクラシックを好んで聴いているわけではないのですが、ハイフェッツのバイオリンは若い頃よく京都の名曲喫茶でリクエストをした覚えがあります。メンデルスゾーンやチャイコフスキー、それにサン・サーンスもいいですね。ピアノはよく知らないのですが、ショパンのノクターン、あれは映画『愛情物語 (原題は The Eddy Duchin Story)』で9-2が超有名になったわけですが、私は9-1の方が好きです。あと、日本では「別れの曲」として有名なショパンのOp.10-3も好きだな。私の恩師はクラシックに精通されていました。ベートーベンやモーツァルトは歳をとると聴かなくなるねと言われ、アルビノーニのアダージョがいいよ、と。短い曲ですが、今でも私は少し寂しい情景を思う時などこの旋律が頭の中を流れ、静かな気持ちになります。

岩城さんは有名な指揮者ですから名前は知っていましたが、著書は初めて読みました。凝った文章ではなく素直に事実を記されていて、それでいて面白いのですから岩城さんの住む世界が面白いわけですね。ウィーンフィルハーモニーの団員をウィーンフィルハーモニカーと言うらしい。ウィーンでは単にフィルハーモニカーと呼ぶようです。この人々の特権ぶりがちょっと引くくらい驚きます。しかもオーディションで合格したのに日本人を入れないという、そんな差別がまかり通っている、らしい。

東京芸大の頃の、楽器によるヒエラルキー（階級）がある話や舞台に立つための特注の靴の話などへーとかほーおとか声に出しながら楽しく読みましたよ。

BGMは Deep Purple の *Smoke on the Water* でした…。